小粥祐子著

『江戸城のインテリア　本丸御殿を歩く』

畑　尚子

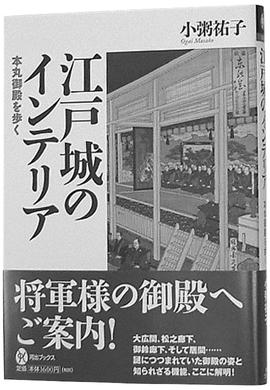
江戸城を研究課題とする者は数多くおり、その切り口も基盤とする研究分野により様々である。本書は小粥氏がプロローグでも述べているように、インテリアデザインに焦点を当てている。

小粥氏は師である平井聖氏と共に、NHKがCG制作を行った「よみがえる江戸城」の企画に携わった。制作のために集めた江戸城図面やインテリア関係の資料、並びに携わった経験が本書執筆に活かされている。

さて、本書の構成は以下のようになっている。

第一章　江戸城御殿―徳川将軍家の居城―
第二章　表―将軍のオフィス空間―
第三章　中奥―将軍とインテリア―
第四章　大奥―秘密のベールに覆われた奥の御殿―

御殿の特質（表は江戸時代を通じてインテリアが踏襲され、中奥と大奥は住人によりインテリアが替る）や残された資料などから、表は部屋ごと、中奥は将軍の代ごと、大奥は人物と特徴のある部屋に分けて解説をしている。



2015年8月30日発行
河出書房新社
B6判　224頁
定価　本体1600円＋税

第一章の前半は江戸城の概要を先行研究よりまとめたもので、本書の特徴が表れるのは「御殿のインテリア」の項目である。部屋の格が座敷飾である床・付書院・棚・納戸構の組み合わせで決まることを指摘する。さらに納戸構の高さや構造から将軍が出御する際、屈む必要があったことを導き出している。しかし、戻る際にどこを通ったかは示されておらず、今後の課題といえる。

第二章で特に興味をそそられたのは、「謡初図屏風」の解説である。この資料は私が所属する江戸東京博物館が所蔵するもので、「江戸城」展の図録に掲載し私が解説文を書いた。同じ資料であっても、異なる研究分野の人が見れば、違う視点での解説となる。

先ず構図から入り、絵師の視点の位置を確認。柱間の建具がすべて取り払われ、御簾が高い位置まで巻き上げられていることに着目し、一般的に入側は畳敷きであるが、大広間は北側を除き板敷きであったことが忠実に描かれていることを指摘する。主題の意匠についても、細長い飾金物、入側の内法長押上の紅白の牡丹の絵が実際に近い形で現されているのに対し、松と鶴をモチーフとした彫刻欄間が入る位置が史実と異なるなど細かく観察している。

さらに、彩色の資料は明るく昼のような錯覚を覚えるが、燭台の数にも着目しこれが夜の儀式であることを思い出させてくれる。

濡縁（「白書院前のステージ」）が武術上覧のステージとなることは、あまり知られていないことなので、具体的に想起できる資料や図があればよりわかりやすかった。この項目での入御・出御の言葉の使い方が、若干読者に混乱を与える。

第三章では中奥のインテリアとして、障壁画の画題や作者に着目しつつ論を展開している。江戸城の内装といえば、美術史的にも障壁画に対する関心が高いが、唐紙が意外に多く使用されていることにも言及している。唐紙についてはエピローグでも補足し、中奥・大奥の天井に使用され、将軍のトイレにも使われるなど、単なる装飾ではなく、御殿内の標識としての役割も持っていたと結

んでいる。唐紙については材質や印刷技術など江戸文化との関わりからも興味深く、さらに探求できる素材といえる。

第四章では二回御鈴廊下に触れている。最初は「謎に包まれた御鈴廊下」の項目で、『江戸城御本丸御表御中奥御大奥総絵図』から、大奥に渡る廊下が三本あるが、御鈴廊下は一本であるとする。二箇所目は、「御台所の住まい」で「万治二年造営の本丸御殿に下御鈴廊下ができたのは寛政三年より後のことであろう」と唐突に出てくる。

二本ある御鈴廊下のうち、下御鈴廊下が設置された時期はいまだに特定されておらず、これがわかれば重大な発見となる。深井雅海氏が九代将軍家重期と推察した説がしばらく踏襲されてきたが、『江戸城　築城と造営の全貌』（同成社、二〇一五年）で野中和夫氏は「新御鈴廊下」と加筆された図の考察などから、もう少し早い享保年間終りから寛保年間の八代吉宗期と考察した。私も『覚了院様御実録』から吉宗の二人の息子（田安宗武・一橋宗尹）が成長する過程と考察し、時期は野中氏の説に近いと勘案した。

下御鈴廊下については、歴史学の先行研究も踏まえ、もう少し丁寧な解説がほしかった。

大奥の中で御小座敷や蔦之間だけでなく、対面所も将軍の「お好み」が反映された将軍主体の建物であることは、従来言われてきた対面所の役割や定義にも関わってくる重大な指摘といえる。

本書には、平井氏の下で時代考証に携わった経験による視点が、随所で見受けられる。例えば、それぞれの空間は常に建具で仕切られていたのではなく、建具の開閉や取り外し、御簾や屏風で空間を自由自在に変えられたことや、御台所の御殿では、夏になると障壁画が描かれた襖から夏用の建具である綟子障子に入れ替えられ、御台所は夏の間障壁画に囲まれて生活しないことなどが挙げられる。また、明るさや暗さへの着眼もその一つといえる。実際にドラマ化されたときに、どうなるのかというのが見えてくる。

一方で、一般書であるので、「内法長押上」「綟子障子」など建築用語については解説が必要と思われた。また、全体的には概説的なところと、専門家として自説を展開するところとの、文章の違いやトーンの差が気になった。

小粥氏とは「江戸城」展の資料借用のため昭和女子大学を訪れたときに知己を得、「よみがえる江戸城」のテレビ収録で再会、その後も交流を重ねている。

私も江戸城や大名屋敷の研究者の端くれとして、日夜図面と格闘している。しかし、文献史学が専門であるので、江戸東京たてもの園で開催した「武家屋敷の表と奥」展では図面のトレースを早稲田大学の建築学科の大学院生に依頼するなど、建築学の人に助けられながら研究を行っている。

図面の解読は歴史学と建築学、考古学など各分野の研究者が共同で行うことが望ましいと考える。視点が異なるし、互いの知識を合わせれば理解できなかったことが見えてくる。しかし、中々異なる分野との共同研究の実現は難しい。そのようななかで、歴史学の研究者が図面に取り組む時は、事前に本書を一読することを推奨する。

（はた　ひさこ　江戸東京博物館学芸員）